



教文館
4,104円(税込)

新島襄と明治のキリスト者たち

―横浜・築地・熊本・札幌
バンドとの交流

本井康博(元大学神学部教授)著

講演集「新島襄を語る」シリーズ(全14巻)が二年前の秋にひとまず完結しました。それ以後は「新島襄交遊録」シリーズの刊行に戻り、半年前(3月20日)に新著を出せました(教文館、A5判・400頁、税抜3,800円)。これは、2005年に出版した『新島襄の交遊―維新の元勳・先覚者たち』(思文閣出版)の続編です。この書が「新島襄交遊録」のいわば「世俗編」とすると、今回は『宗教編』に相当します。主としてプロテスタント他教

派の指導者や宣教師を相手に、新島襄がどのような交流(時には衝突や対立)を展開したのか、それをつぶさに究明いたしました。取り上げた人物は、内村鑑三や植村正久を始め、新渡戸稲造、押川方義ら十数名のキリスト者です。中には、これまであまり知られていなかった「築地バンド」の田村直臣なども登場させました。

本書から浮彫りにされるのは、初期キリスト教界での新島の立ち位置です。天空図で言えば、いわば北極星と言えるでしょう。この点は、次に刊行予定の『宗教編 その2』では、さらに明白になります。そこでは、自派陣営(同志社派)でも言うべき組合教会派)に所属する澤山保羅や成瀬仁蔵(朝ドラ「あさが来た」でブレイク)といった有力者を取り上げます。これが陽の目を見ると、その次は『宗教編 その3』で、いよいよ新島の教え子たちが続々と登場いたします。

著者より



キリスト新聞社
1,836円(税込)

すてたもんじやない

―同志社大学チャペル・アワー・メッセ―

越川弘英(大学キリスト教文化センター)著

サブタイトルにあるように、本書は私がキリスト教文化センター主催のチャペル・アワーで語った奨励(メッセ―)から23編を選んでまとめたものである。私の場合、チャペル・アワーの奨励はキリスト教的聖書的であることを基本としながら、「同志社の建学の精神・人物・歴史に関連するもの」、「時事的な話題や課題に関わるもの」、「私自身の人生経験や考えていること」現在の学生に伝えたいこと」のいずれかに関わる話をするように心がけている。

最初のメッセ―(良心の由

来するところ)は2005年5

月に同志社大学の学生を含めて107名の命が奪われ、多くの方が傷を負ったJR福知山線脱線事故から1ヶ月を経て語ったもので、最後の「平和と安全への道、ただし戦争経由」では2015年7月のいわゆる「戦争法案」をめぐる問題を取り上げた。その間には、クリスマスや悪魔の問題に関する奨励、留岡幸助や岸本能武太といった同志社の先人に関する奨励、忌野清志郎の歌やアウグスティヌスの『告白』からヒントを得た奨励など、テーマは我ながらけっこう多岐にわたっているように思う。振り返ってみれば、過去10年余りの間に自らもまた同志社やこの社会も、急速かつ多彩な変化をたどってきたことをあらためて実感した。もしお時間と関心があれば、この同じ時期を歩んでこられた同僚の教職員の皆様にご一読いただき、ご高見ご高評をいただければ嬉しいです。

著者より



新潮社
799円(税込)

個人を幸福にしない日本の組織

太田肇(大学政策学部教授)著

大学入試や企業の採用試験では応募者を競争させ、それを組織の側がテストや面接でふるい落として可否を決める。入った後も、教師や上司による評価が決定的な重みをもつことに変わりはない。またPTAや町内会では全員加入が原則とされ、役員は選挙や抽選の結果で半強制的に引き受けさせられる。地方政治に目を向ければ、財政事情が厳しく十分なサービスが受けられなくても地域住民の責任であり、それが住民自治だとされる。いずれも組織の論理からすれば常識である。

大半の人はこのような「常識」にさして疑問を抱かず受け入れてきた。しかし、なかには理不尽さや疑問を感じている人もいる。しかも近年はグローバル化や情報通信技術の急速な発達により、組織の論理を前面に出したやり方が合理的ではなくなってきた。逆にいえば、組織が自らの論理を振りかざさず、公平に場と機会を与えるだけでよいケースが増えてきたのである。そうすると、これまで日本的な良さ、強みとされてきたものが桎梏、弱みに転化する。

本書では、これまで半ばタブーとされてきた人物重視の入試改革、始めに「絆」と分権ありきの地域づくりなどが内包する影の部分にメスを入れ、個人の自由と公平な社会づくりのために必要な改革案を提示した。日本的な組織が好きなのも、そうでない人も、身近なところから組織というものを考え直すきっかけにしてもらえば幸いである。

著者より



現代史料出版
3,888円(税込)

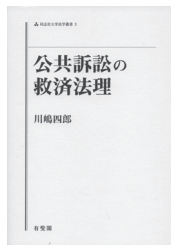
越境する「二世」―1930年代アメリカの日系人と教育

吉田亮(大学社会学部教授)編著・物部ひろみ(地域文化学部教授)他著

本書は、南北アメリカ、ハワイ、日本およびその帝国内(満州、朝鮮)で展開された日系二世を主体とする越境教育活動を1930年代に焦点を当てて考察する研究叢書である。「太平洋の架け橋」が全章共通のキーワードとなっているが、「架け橋」とは文化外交官として日米を仲介し、両国の友好関係を促進できるような日系二世の理想像を意味し、当時周縁的な立場に置かれた日系人の地位を好転するためのストラテジーとして、移民世代である一世によつて提唱

された。1930年代になると、成人した二世自身が、この「架け橋論」を受け継いで自分たちのニーズに適応させながら独自の活動を行うようになる。やがて架け橋論は、北米、ハワイから日本へ、そしてブラジルや満州へと移植され、実践されていった。本書では、世代交代、地理的・文化的越境に加えて、組織活動、宗教も重要な切り口となっており、8人の研究者が、日米学生会議、祖国見学団、北米キリスト者による架け橋育成プロジェクト、カリフォルニアの日本語学校協会、ハワイの汎太平洋仏教青年大会、シアトル仏教会の日曜学校、日米青年連合を始めとする在日二世団体、ブラジル二世の学生連盟や機関紙などを扱う。また、越境教育の具体例として同志社大学の布哇寮や研学教授制度(二世が同志社で学びながら、英語教員も務めた)への言及もある。日系人史、国際交流、二文化教育、アイデンティティ・ポリティックスなどに関心をお持ちの方に一読していただければ幸いである。

物部ひろみより



有斐閣
7,560円(税込)

公共訴訟の救済法理

川嶋四郎(大学法学部教授)著

公共訴訟とは、当事者による訴訟活動のプロセスや結果(判決・和解)が社会的な影響を与える民事訴訟をいい、その手続構造の探究は、現代の民事訴訟法学における重要な課題となっています。市民の間に多数の権利侵害が生じた場合、原告被告といった二当事者対立構造をもつ伝統的な民事訴訟法では、十分に対応しきれない問題が数多く存在するからです。

本書は、半世紀近くにわたりアメリカで展開を遂げた制度改革訴訟を素材として、日本法への示唆を求めたものです。日本ではなじみの少ない「救済法」

(権利侵害等を起点にどのような保護を与えて人を救うかに関わる法領域)を足がかりに、アメリカ公共訴訟の入口から出口に至る手続過程全体を研究対象としました。それは、権利侵害の判断段階、判決・和解による具体的救済の形成段階、そして強制執行段階に分かれますが、日本にはない救済志向の多様なアイデアに満ちています。

日本の民事訴訟では、伝統的に金銭による救済を目的とする訴訟事件が多く、手続構造もそれに合わせたものになっています。本書では、かけがえのない人格的な利益の保護プロセスを中心に据えた新しい民事訴訟のあり方を探究していますが、今後、救済志向の民事訴訟法を語り続けていきたいと考えています。なお、本書は、2012年度に、アメリカ・ノースカロライナ大学で行った本学在外研究の成果の一部であり、学術書・法学「法学叢書」の一冊として刊行させていただきます。心から感謝を申し上げます。著者より



中央公論新社
1,998円(税込)

タミナルから荒れ地へ

「アメリカ」なき時代のアメリカ文学

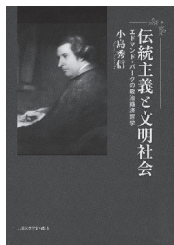
藤井光(文学部准教授)著

『タミナルから荒れ地へ』は、21世紀のアメリカ文学の流れと、そこに翻訳という作業がどう関わるのかを考えようとした本です。前者についてはやや真面目に書きましたが、後者については笑いながら読んでもらえるような文章を目指したつもりです。アメリカ文学は、アメリカ合衆国という社会と同様に、時代に応じてめまぐるしく変化する一面を持っています。特に21世紀に入ってからアメリカ小説は、同時多発テロやイラク戦争

などの大きな事件を取り上げるだけでなく、作家の感性を育む土壌そのものの変化が目につくようになってきました。国家の枠を超えるグローバル化が、一気に進行したことで連動して、日本の現代作家たちとも似た、幻想的で無国籍な感性が登場し始めたのです。

戦争や労働といった、今世紀の文学で重要になる社会問題も取り上げてはいますが、基本的には、あまり大上段に構えた書き方ではなく、10代や20代の人でも気軽に手に取れるような本になつてくれたらと思つて書いています。その願いもあつて、大学の授業で話した内容をもとにしたり、翻訳のクラスでの出来事をちよつと戯画化したりした章も入れました。文学は誰にでも開かれていますし、物語に

著者より



京都大学学術出版会
5,616円(税込)

伝統主義と文明社会

—エドモンド・パークの政治経済哲学

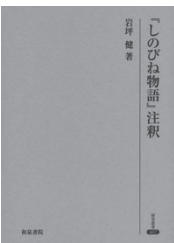
小島秀信(大学商学部助教)著

本書は、18世紀イギリスの政治家エドモンド・パークの古典的名著『フランス革命の省察』(1790年)を中心に、彼の政治経済哲学の重要な一面を明らかにしようとしたものです。パークは、フランス革命を批判し、今日の主要なイデオロギー

の一つである「保守主義」を確立した思想家として、思想的に非常に重要な位置付けを与えられています。しかし、彼の政治経済哲学は、一方で自由市場主義を唱えつつ、もう一方で騎士道や宗教といった伝統的な精神

を擁護するという、経済的近代性と政治的封建性の両義性を含んでいました。その両義性をどう理解するのかは、パーク研究の一つの論点となっており、そこに精神分裂の側面を見る研究者や、その政治的封建性はレトリックで、経済的近代性の思想家、資本主義の擁護者にすぎないとする研究者も現れました。

私見ですが、パークの考えは、その多くの封建的言説にもかかわらず、あくまで擁護しようとしていたのはイギリスの近代文明社会の構造であり、ただ、その構造は、騎士道と宗教の精神という封建的エートスによって支えられていた、というものでありました。詳細は紙幅の関係上ここでは述べられませんが、こうしたパークの思想を読み解くことは、封建制の革命的破壊を伴うことなく、近代化することにも成功したイギリスそのものをも読み解くことになるはずでしょうし、その意味では、非常に重要なものであると言えるでしょう。著者より



和泉書院
9,720円(税込)

『しのびね物語』注釈

岩坪健(大学文学部教授)著

武士の時代になつても、否、公家の時代が喪失したからこそ、平安文学への憧れは強まり、『源氏物語』の影響を色濃く受けた中世王朝物語が開いた。それらの中で『しのびね』型と総称される一群があり、その代表作が『しのびね物語』である。本書は初めての詳細な注釈書であり、その目的は『源氏物語』の愛読者が本作品を読んで思い起こすもの、すなわち『源氏物語』との類似や相違を注することである。

本書のテキストには、いまだ活字にされていない写本を採用した。当本には傍注と頭注が詳細に記され、それらは江戸時代

の国学者たちの研究成果であり、すべて初公開である。本書を出版するにあたり、読解の便宜を図り作品全体を章段に分ち、古文は歴史的仮名遣いに直したり、句読点や濁点を加えたりして、章段ごとに全訳と注釈を付けた。巻頭に梗概と系図、巻末に解説・年立・参考文献を置く。口絵では奈良絵本の挿し絵(飛騨高山まの博物館所蔵)を、初めてカラー写真で紹介した。

本書はもともと雑誌に連載していたもので、その抜き刷りを研究者に送りアドバイスをお願いした。なかでも三角洋一先生(当時、東京大学教授)はいつもお葉書をくださり、ご指導を仰いだ。ご教示を取り入れ、大幅に追加・加筆して本書を刊行した際には御礼状を頂戴したが、いささかなりとも御恩に報いられたかどうか心もとないが、今はただ、ご冥福をお祈りするばかりである。著者より



中国書店
10,800円(税込)

章君宜研究

―記憶のなかの中国革命―

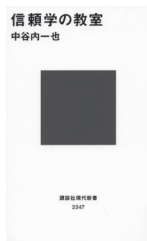
楠原俊代(大学グローバル地域文化学部名譽教授)著

本書の前編は、中国最大の文学専門出版社の社長で、60歳を過ぎてから作家として活躍した章君宜(いくんぎ、1917～2002)の代表作『思痛録』の翻訳です。といってもただの翻訳ではありません。『思痛録』は章君宜が中国共産党に入党して以来、黨員として生きた50余年にもおよぶ中国革命の「真実」を振り返って総括した回想録で、1998年に北京版が、2000年には香港版が出版されました。この香港版によって、北京版では毛沢東個人に対する批判とそこから出てくる中共批判、

政策・運動の中心についての詳細な記述の部分において、大幅な削除・書き換えがおこなわれていたことが明らかになりました。つまり、この点については中国大陸において、いまだあからさまには論じられないものなのです。本書に収録した『思痛録』では、香港版を底本として、北京版との異同を逐一注記することによって、中国大陸では中国革命がどのように記述されなければならぬか、その歴史認識のありようを明らかにしようとした。

『思痛録』が出版されると、極めて大きな反響を引き起こし、多くの知識人を啓発して、歴史を反思する(反省・振り返って考えなおす)責任感と使命感を呼び覚ました、と高く評価されましたが、日本ではほとんど知られていません。本書前編の『思痛録』は本邦初訳で、後編には、章君宜についての論考と年譜を収録しました。どうぞ手に取って読んでみてください。

著者より



講談社
821円(税込)

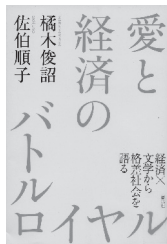
信頼学の教室

中谷内一也(大学心理学部教授)著

本書のテーマは「信頼は何によって決まるのか」です。この問題に対する従来の社会科学主流の回答は「公正で誠実な姿勢」と「有能さ」の2要素となります。実際、社会的に重要な問題に対しては、しばしば、第三者専門委員会が作られ、首相や大臣、首長の諮問を受けて、検討の結果を答申します。なぜ、第三者専門委員会が用いられるのか？それは、構成員の第三者性が公正さを担保し、専門性がある問題に関する能力を担保するので、答申が信頼できると期待されるからです。第三者専門委員会とは、多くの場合、大学教

員を構成員に含み、同志社でも学外の各種委員をされている方は多いでしょう(ちなみに、大学教員は有能どころか、むしろ社会的には無知、幼稚で、公正どころか、むしろ自分勝手な者が多い)。それがなぜ有能で公正というのだ！と異議が出そうでも、私も首肯するしかありませんが、あくまで当該問題に限っては専門知識があり、大学から俸禄をあてがわれているので政府や自治体に対して遠慮なくモノをいえる立場にあります。ところが、そういった第三者専門委員会が出した答申内容を人びとが是認するとは限りません。最近では、樹添前東京都知事の政治資金問題に対する第三者弁護士2名の報告に世間は納得しませんでした。ということは、社会科学主流の信頼モデルは足りない点があることになりました。その足りない点とは何かを知りたい方は、ぜひ本書を紐解いて下さい。

著者より



青土社
1,944円(税込)

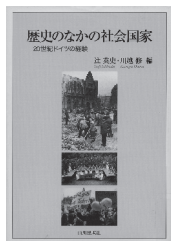
愛と経済のバトルロイヤル

―経済×文学から格差社会を語る―

佐伯順子(大学社会学部教授)他著

「女性活躍加速のための重点方針2016」(2016年)「女性活躍推進法」(同)にみるように、ジェンダー平等の問題は日本社会の大きな課題である。偶然ながら、本書の対談も同時期になされ、社会科学、人文科学を含めた多角的な観点から、何が日本社会におけるジェンダー平等を妨げているのか、より豊かな日本社会のライフスタイルの可能性はどのようなものか、十数時間かけて議論した。家事育児に専念という意味の「良妻賢母」は、決して日本の「伝

統」ではなく、明治の近代化以前の一般市民の女性たちの多くは、夫婦共稼ぎで、生計を担いつつ出産もしたという歴史の実態を、経済学および女性史の観点から確認しつつ、男性の稼ぎのみで生活できる、日本の高度成長期という、長い歴史のうちのごく特殊な時代の恋愛や結婚のモデル、それを背後で支えた生命保険等のシステムや税制の経済モデルから脱却することが、今後の鍵であると指摘した。モンスターペアレントのように自己中心的な一部の親たちの問題化もあり、高度経済成長期の表層的な躁状態は必ずしも、今日の日本社会に心の豊かさや幸福感をもたらしていない。逆に、つましくとも経済的に支え合うパートナーシップこそ、豊かな心の絆を育む可能性もある。おのれの道をそれぞれに模索した八重と襄のパートナーシップも想起しつつ、物(経済)と心(愛)の両面から、男女共生社会の可能性を考えるヒントになれば、と切に願う。著者より



山川出版社
4,320円(税込)

歴史のなかの社会国家

―20世紀ドイツの経験―

川越修(大学経済学部教授)他編著

本書は、平成21年度から3年間にわたり日本学術振興会科学研究費補助金の支援を受けて、計9名の若手・中堅ドイツ史研究者(同志社大学からは文学部の服部伸教授とグローバル地域文化学部の石井香江准教授が参加)と行った共同研究の成果です。

「社会国家」というのは聞き慣れない言葉だと思いますが、ドイツでは福祉国家に代わる概念として用いられています。私たちは本書において、20世紀的な国家と社会の関係が形づくられる歴史過程をリードしたとも言

えるドイツ社会の特質を、他の現代社会との比較において明らかにするために、この概念を使っています。

といってもこの本で取り上げられているのは、抽象的な国家論や制度・政策論ではなく、20世紀のドイツにおける家族と国家、そしてその両者をつなぐ中間組織との間で多様な家族の社会への「包摂と排除」をめぐって繰り広げられた、具体的な葛藤です。在宅看護と家事援助、高齢単身女性の貧困、戦争障害者オルタナティブな市民運動、民間福祉団体の活動、東ドイツ社会主義社会における高齢者、育児をめぐる家族と社会の葛藤、性規範の多様化等々、現代日本において私たちが直面しているさまざまな問題が本書の検討対象となっています。

ドイツ社会の歴史を鏡(比較対象)として日本社会のあり方を歴史的に考えようとする私たちの試みを、是非手にとって下さい。

著者より

いのちのことは社
1,728円(税込)

「弱さ」の向こうにあるもの

— イエスの姿と福祉のこころ —

木原活信きはらのかつのぶ（大学社会学部教授）著

今の時代は、強さに憧れ、「弱さ」は避けるべきものとして扱われがちな世の中ではないかと思えます。本書は、そのような時代にあつて、一人のキリスト者として、あえて、「弱さ」が本来もつ根源的な意味について、平易な言葉で解き明かすことを試みました。私の学問的に探究する「弱さの福祉哲学」やキリスト教社会福祉学研究を、一般市民向けへ分かりやすく説明したエッセイと言えるかもしれません。これまでの私の「硬派」な学

術論文や講義や講演等では語っていない、日常生活の素朴な思いや、「信仰、希望、愛」について率直に触れています。また私の誕生に際しての「秘話」なども公開しています。

本書は、読者から予想外の反響があり、NHKの「心の時代」、「ラジオ深夜便」などテレビ・ラジオ等の公共放送で出演させていただき、本書で触れた自分の思想や日々の思いについて語る機会が与えられました。福祉にかかわる人や、キリスト教に興味のある人は、是非、手にとって読んでご批判を賜れば幸いです。

著者より

思文閣出版
5,400円(税込)

近代日本のユダヤ論議

宮澤正典みやざわせいけん（女子大学名誉教授）著

日本語でユダヤ研究に携わるうえで、ぜひ読んでおきたい一冊である。またユダヤ研究者に限らず、本書が広く読まれるべき理由がある。狂信的な反ユダヤ主義によって国民を戦争へと誘導しようとした四天王延孝が活躍した昭和戦時下のみならず、1980年代になつても「職業的反ユダヤ主義」とも呼べるような事態は起きている。日本におけるユダヤ議論についての長年に渡る研究成果である本書は、これらを冷静に整理、分析する。私の認識では、このよう

な著者の視点が広く共有されれば、根拠を欠いた反ユダヤ主義に陥ることを社会は免れ得る。これまで著者が主に取り扱ってきた1970年代までの議論に加え、80年代以降の論考も読めることが本書の魅力である。また巻末に付録された73頁に及ぶ、2005〜2015年の文献目録は、『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録1877〜1988』（新泉社、1990年）と『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録1989〜2004』（昭和堂、2005年）の続きであり、著者が地道に収集した貴重な資料である。

2014年初頭に同志社で開催された非公開研究会の折、東京に在住するユダヤ学の専門家から「宮澤先生が研究をしてくださったからこそ、現在、我々が様々なユダヤ研究に携わることができるといふような発言があつた。本書を読みながら、この発言が思い起こされ、深く同意する胸中であつた。

平岡光太郎ひらおかみつたろう（大学特別任用助教）

講談社
1,890円(税込)

〈お受験〉の歴史学

— 選択される私立小学校
— 選ばれる親と子

小針誠こばりまこと（現代社会学部准教授）著

本書は、私立小学校の選択と選抜に関わる〈お受験〉問題を、明治期から現代に至る歴史を通じて明らかにしている。

本誌読者の多くは公立小に通学していたことだろう。他方、国立や私立の小学校の卒業生の方もいるだろう。その場合は入学試験を受験、合格しなければならぬ。特に私立の場合、入学金や授業料は高額で、必然的に児童の家庭環境も恵まれたものとなる。

親たちは私立小の教育理念や教育活動の魅力、そして本学園がそうであるように、幼稚園・

小学校から大学に至る一貫教育に惹かれ、私立小を選択している。他方、公立校の抱える問題や矢継ぎ早に進められる教育改革を回避して、私立小を選択するケースも珍しくない。

その結果、入学定員を上回る志願者を集め、過酷な入学選抜競争とそれに向けた準備教育が行われてきたのである。そして、この〈お受験〉の風景は大正期から今日まで連綿と続いてきたのである。

ところが、昨今では厳しい選抜を科す私立小が少数派になりつつある。学校設置基準の緩和により、私立小の数は急増したものの、少子化と長引く不況により、定員割れや休校・廃校の危機にある学校も少なくない。本書で論じた私立小（お受験）の来し方を通じて、小学校を中心とする日本の公教育システムの特質や私立学校の行く末を考えるうえで、是非ご笑覧頂ければ幸いである。

著者より

新大学長紹介



同志社大学長(第33代)

松岡 敬まつおか たかし

1955年生まれ。

79年同志社大学工学部卒業、81年工学研究科博士前期課程修了、84年工学研究科博士後期課程単位取得退学。

84年近畿大学工学部助手、87年工学部専任講師、91年工学部助教授。

93年〜98年同志社大学工学部助教授。

96年〜97年サリー大学材料工学科客員研究員。

98年〜現在同志社大学理工学部教授、01年〜現在理工学研究科博士後期課程教授、05年〜06年医工学研究センター長、06年〜10年理工学部長、10年〜13年副学長、15年〜16年3月評議員(理工学部)、16年〜現在理事、16年〜現在高等教育研究機構長。

研究分野は、材料・材料力学、機械要素。

任期は2016年4月1日から4年間。